

「金字塔」の由来とそのイメージ形成

陳 力 衛

はじめに

「金字塔」という語は日本人の造った「和製漢語」ではないか。何年か前に、とあるテレビ局からその設問をクイズ番組に使用する可否について聞かれた。番組制作側はむしろその肯定の方向への答えを期待するものであった。たしかに、単に現行の辞書類を調べれば、『新明解語源辞典』（小松寿雄，鈴木英夫編，三省堂，2011），『新明解現代漢和辞典』（影山輝国，山田俊雄，戸川芳郎，伊藤文生，三省堂，2011）は、いずれもそれを「和製漢語」と見なしているし、そして、『日本国語大辞典』（小学館，2001）と中国の『近現代辞源』（上海辞書出版社，2010）を比較してもわかるように、日本語の用法は1886年にさかのぼってすでに当時の著名人物徳富蘇峰の文章に用いられたが、中国語に至っては1899年の『清議報』にある梁啓超の文中になってようやく現れ、日本語での用例より中国語のほうが遅れて出てくることになる。しかも日本で『清議報』を発行する梁啓超は何回も徳富蘇峰の文例を援用したことで知られており、故に『近現代辞源』でははっきりと「金字塔は日本語であり、およそ19世紀末に中国へ伝入した」とまで言い切っている。

実際はどうだろうか、当時、私はテレビ局にこの結論について要慎重で、クイズ番組の設問には適せず、少なくとも19世紀の英華字典における対訳実態を調査してはじめて比較的に確実な回答を得ることができる、と答えた。というのは、『近現代辞源』はこの方面における用例の採取不足がかつて問題として取り上げられることがあったからである¹⁾。

1. 英華字典から英和辞典へ移入された「金字塔」

台湾中央研究院近代史研究所のデータベース『英華字典資料庫』を使えば、こういった問題の解決をより簡単にすることができた。英語 Pyramid で検索してみたら「金字塔」が下記の19世紀60年代の英華字典に出ていることがわかる。(表1)

表1 19世紀英華字典における「金字塔」

英華字典	語	pyramid	Pyramidal	Pyramidic, Pyramidical
1822 モリソン英華字典		尖瓣体 Many sided pyramid 衆瓣尖体 pyramid triangular 三瓣尖体		
1844 ウィリアムズ英華韻府歴階		尖瓣体		
1847-48 メドハースト英華字典		塔, 高而尖の石碑		
1866-69 ロプシャイト英華字典		金字塔	金字塔形	金字形的
1884 井上哲次郎訂増英華字典		金字塔, 稜錐体	金字塔形	金字形的
1872 ドーリットル英華萃林韻府		pyramid or pagoda 尖瓣体, 尖方形 稜錐体 (数学及星学之語)		
1899 廊其照華英字典集成		塔, 高而尖の石碑	金字塔形	

上表にある Pyramid の対訳からわかるように、ロプシャイトの英華字典の前までは、「金字塔」が現れず、多くはモリソンの「尖瓣体」を援用している。しかし、19世紀最大規模のロプシャイトの英華字典に至っては次のように出ている。

Pyramid 金字塔

Pyramidal 金字塔形

Pyramidic, Pyramidical 金字形的

- 1) 拙稿「国際シンポジウム「近代語の語源研究とその周辺」についての報告——『近現代辞源』の評を兼ねて」『東方』364号, 東方書店, 2011年6月。なお、『近現代辞源』のあげた梁啓超の例を1899年としているが、実際は1900年としたほうが正しい。

「金字塔」の由来とそのイメージ形成

周知の通り、この辞書は日本での所蔵が多く、しかも二度も翻刻版が出され²⁾、日本近代語の形成に与えた影響が大きい。上表にある井上哲次郎『訂増英華字典』（羅布存徳原著、井上哲次郎訂増、1883-1884年刊）はその翻刻版の一つであり、「金字塔」の日本語への移入を直接果たしただけでなく、あらたな訳語「稜錐体」をドーリットル『英華萃林韻府』（1872）から増補した。後述するように、のちに中国語におけるこの語の普及は井上のこの辞書に負うところが大きかったのである。

井上の翻刻本より四年も前に、もう一つの翻刻本がすでに出版されていた。すなわち『英華和訳字典』（津田仙、柳沢信大、大井鎌吉合訳、中村正直校正、1879年刊）である。それも訳語として「金字塔」のまま援用されただけでなく、「スギナリヅカ」と、完全に日本的な慣習にしたがって対訳されている³⁾。後に実際に「金字塔状」をもって樹形を形容する表現が日本語に見られるようになる。

上記二種の直接翻刻の日本語版以外に、明治6年（1873）出版した『附音挿図英和字彙』にもロプシャイトの英華字典の影響が色濃くみられ、多くの漢字訳語がそこから採録されることで知られている。その中に、Pyramid を「金字形、金字塔」と訳すのも現れの一つである。この辞書は明治初期の三大辞書と言われ、広泛に使われ、とくに「金字塔」にわざわざ字音読み「キンジタフ」をルビとしてつけ、この語の日本語への移入に決定的な役割を果たしていたと言えよう。

一方、鄭其照 (Kwong Ki Chiu) 編『字典集成』（1868）は中国人編纂のはじめの英華辞典として、先行のメドハーストの辞典から少なからぬ影響を受けている。たとえば、表1にある Pyramid の訳は完全にそのまま写

-
- 2) 拙稿（2012）「英華辞典と英和辞典との相互影響—20世紀以降の英和辞書による中国語への語彙浸透を中心に—」『JunCture』03号を参照。
 - 3) もちろん、ヘボンの『和英語林集成』の英和部分（初版1867及び再版1872）ではともに Pyramidal を suginari と訳されたので、『英華和訳字典』（1879）はそれを参照した可能性を排除できなくなる。

してある。この辞書は後に数度にわたる増補があり、上表にある1882年(自序)の循環日報版(1899)になって「Pyramidal 金字塔形」の収録がみられるようになる。したがって日本において明治14年に永峰秀樹がこの辞書を『華英字典』(1881)と翻刻したが、中にはまだ「Pyramidal 金字塔形」が収録されていないところからみると、少なくとも『蘭其照辞典』の1879年以前の版によって翻刻されたものであろう。なぜなら現在1868, 1875, 1879の各版にその対訳が収録されることを確認できず、1882年以後の版になってはじめて「金字塔形」が出てくる可能性があり、実際には現存の1887版にすでにこの語を収録しはじめたからである⁴⁾。

そこで、はっきり言えるのは、英華字典の伝播を通して、早くも1873年の『附音挿図英和字彙』、1879年の『英華和訳字典』、1884年の『訂増英華字典』において、直接に英語と対訳した「金字塔」が日本に入ってきた。その後の英和辞典類は多くこの訳語を使い、たとえば明治17年の『英和袖珍字彙』(1884)⁵⁾には、Pyramid に対して片仮名で「サキノトガリタルハシラ」と注釈し、音読の「キンジトウ(金字塔)」とPyramidal に対訳する「キンジトウノ」を並べている。『附音挿図英和字彙』第二版の『増補訂正英和字彙』(柴田昌吉, 子安峻著, 東京:日就社, 1887)には、「金字形, 金字塔」という訳語を援用しただけでなく、井上哲次郎『訂増英華字典』(1884)に増補された「稜錐体」も載せてあることから、両者の影響関係が窺える。

2. 漢訳洋書における「金字塔」の描写と中国人の想像

上記のように「金字塔」という語が中国語の出自であれば、いつ、どの

4) 実際に調べてみると、1882年(自序)をもつ循環日報版(1899)では、もしかしたら光緒十三年(1887)重鐫版よりも早い版を利用したかもしれない。なぜなら、後者はPyramidの従来の語釈「塔 高而尖的石碑」の後に、新たに「金字形」という語を付け加えたからである。

5) 西山義行編, 露木精一訂『英和袖珍字彙』, 東京:岩藤錠太郎, 1884

「金字塔」の由来とそのイメージ形成

ように中国語に使用されたのか、言い換えれば、金字塔に対する中国人の認識過程がいかに展開されてきたのかを振り返ってみなければならない。

中国近代の著名なる啓蒙思想家梁啓超はかの『中国近三百年學術史』において次のように述べている。

言世界地理者、始于晚明利瑪竇之『坤輿図説』、艾儒略之『職方外紀』。清初有南懷仁、蔣友仁等之『地球全図』。然乾嘉学者視同鄒衍談天、目笑存之而已⁶⁾。

要するに、西洋から来た宣教師たちは世界地理及び関連奇蹟を中国に伝播した先駆者であり、当時の中国人はその知識をあまり信じなかったという。しかし金字塔に関して、マテオ・リッチ（利瑪竇）は触れていないし、アレニ（艾儒略）の『職方外紀』（1623）においてつぎのような記述がみられる。

昔国王嘗鑿数石台、如浮屠状、非以石砌、是擇大石如陵阜者、鏗削成之。大者下趾闊三百二十四步、高二百七十五級、級高四尺、登台頂極力遠射、箭不能越其台趾也。

この記述が後の人の金字塔に対するイメージの基本的描写となり、ここに、「石台」をもってそれを表述し、「浮屠状」の如しと形容されていく。それからさらに半世紀が過ぎると、康熙甲寅年（1674）にフェルビースト（南懷仁）の『坤輿図説』が出版され、その下巻末に異物図を附し、合わせて動物 23 種、そして七奇図（即ち世界七大不思議）を附している。その中で、下記のように金字塔の様子を図と文と並べて描写したことで、はじめて視覚的に人々に金字塔の魅力を感じさせた。（図 1）：

利未亜洲厄日多国孟斐府尖形高台多祿茂王建造、地基矩方、每方一里、周圍四里、台高二百五十級、每級寬二丈八尺五寸、高二尺五寸、皆細白石為之。自基至頂、計六十二丈五尺、頂上寬容五十人。造工者每日三十六万。

文中の「利未亜洲」は即ち現在のアフリカ、「厄日多国」はエジプトの旧

6) 梁啓超：『中国近三百年學術史』、東方出版社 1996 年版、391 頁。

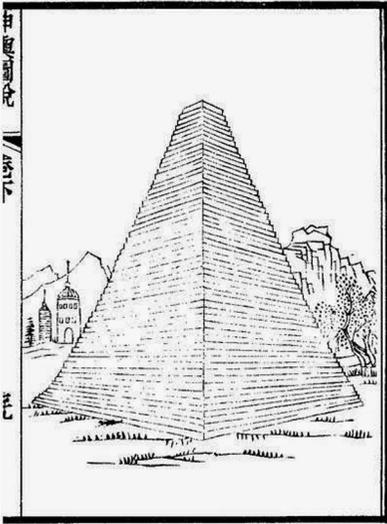


図1:『坤輿図説』

称。『坤輿図説』では「尖形高台」でそれを記したが、「金字塔」という語をまだ使っていなかった。

『坤輿図説』及び七奇図の伝播と影響に関して、鄒振環(2011)が詳細な論考を発表している。つまり、当該書は後に『虞初新志』(1704)や『古今圖書集成』(1726)、『四庫全書』(1782)に採録されることによって、中国知識人の金字塔に対する想像を掻き立てただけでなく、日本にも

影響を与えていった。拙稿はこの研究を基礎に、さらにいくつかの実例を補充し、日本での受容過程をより詳らかにしようとする。

19世紀に入って、中国におけるキリスト教の伝播につれて、金字塔に関する描写もますます増え、まず、プロイセン人の宣教師ギュツラフ(郭実獵)が広州で発行している雑誌『東西洋考毎月統記伝』(1838.8.1)に次のような記述がみられる。

古王者建塔，四方高七十七丈，各方一百十丈，雖三千年，其塔還存。

ここではじめて「塔」をもってそれを称し、その後もかれはシンガポールで出版された『古今万国綱鑑』(1838)にも依然として「高塔」と称しているが、ウェイ(禪理哲)の『地球説略』(1856)⁷⁾に至っては挿絵を添えてそれを「石塚」と称し、下記のように記している(図2)。

又介爾阿城⁸⁾相近处，有最奇之古跡。非亭，非塔，状如塚，皆石為之。

7) 1848年初版は『地球図説』という名で刊行。

8) 「カイロ」の音訳。

「金字塔」の由来とそのイメージ形成

基闊頂尖于峯。其最大者，即其下之一隅量之長約計六十丈，頂之高亦約有六十丈。

この記述は十九世紀中葉以降の金字塔に関するスタンダードなものとなり、金字塔への認識の「知的倉庫」⁹⁾へと蓄えられている。『坤輿図説』にあるイェズス会士たちから伝わっている独立の塔に比べて、その挿絵は初めて遠近法を使ってギーザにある三大金字塔を一図に収め、実際の様子として提示され、ますますその奇異なイメージをもって人々の想像を刺激してしまう。下図のように、1860年にその書は日本において翻刻出版し、広く読まれ、少なからぬ日本人の世界認識を喚起させた。

この書においては、ギュツラフの「塔」としての認識に対して、明確に「非亭，非塔」と否定し、それを「状如塚」と塚のごとしと評している。中国人の徐繼畬の『瀛寰志略』(1849)は『地球説略』より早く成立したものの、もし彼が1848年の初版『地球図説』を参照しているのであれば、

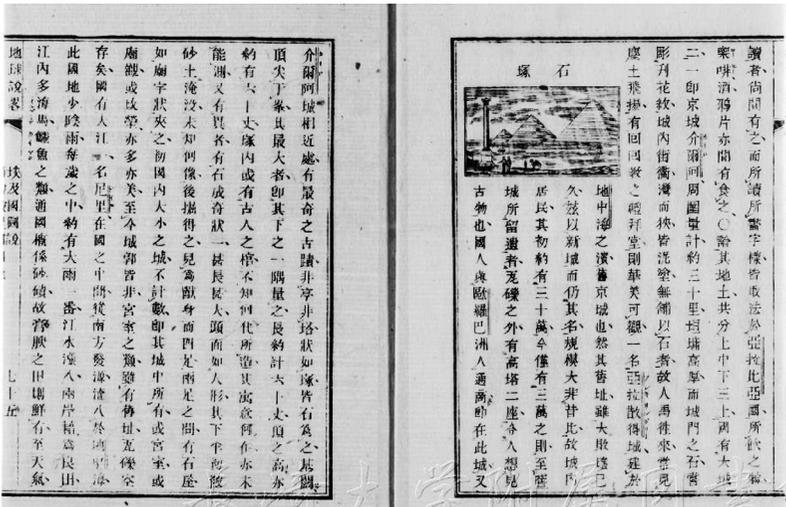


図2：日本版（箕作阮甫訓点，老皂館，万延元年（1860））

9) 潘光哲の用語，その著(2014)に見える。

下記のような「古王塚」という描写ももしかしたらウェイ（禪理哲）の著述と関係しているかもしれない。

城外有古王塚数処、皆基闊頂鋭。有一塚基闊五里、高五十丈、頂似峯尖。

しかもその最後の割注に「南懷仁字内七大宏工記有此塚」と見えることから、19世紀の当時に至ってもフェルビーストの『坤輿図説』の影響がなお存在することが窺える。

魏源の『海国図志』百卷本(1852)はそれまでの各種の西洋著書の関連説を収録している。たとえば、

麦西国自古有名、於商朝年間、国家興盛、所筑之塔、高大尚存、其墳塚如殿、及於今日、有人不遠万里以觀此古跡。

ここでそれを「塔」と称するだけでなく、「墳塚如殿」の説をも取り入れ、とくに最後の「人々は万里をいとわずこの古跡を觀に来る」というのは当時において金字塔がすでに名をはせた名所旧跡となっていることを物語っている。

したがって、19世紀の中葉になっても、中国語のコンテキストにおいて、まだ「金字塔」という語が現れていない。徐繼畲と魏源の描写も多く西洋人の言い方に出自している。

それでは、いったい最初に金字塔を訪問した中国人が誰であろうか、誰がそれを名づけたのか、といった疑問がでてくるが、それらについていまだに確定には至らないが、少なくとも現在見られるのはみな19世紀中葉以後の遊記であり、たとえば、カトリック教徒の郭連城が、咸豊9年～10年(1859-60)に書き残された『西游筆略』¹⁰⁾という歐洲遊記の下巻にお

10) その書のために序を書いた陸霞山もカトリック教徒であり、しかも郭連城より八年も前に欧州に渡り、曰く「所錄沿途見聞皆余曩所身親目睹而毫無浮詞者也。」と、自分の体験にあわせて信憑性が高いと誉めているところからみれば、本人もエジプトに行ったことがあると考えられる。場合によっては、金字塔を訪れた最初の中国人だったかもしれないが、なんの記述が残されていないのが残念である。

「金字塔」の由来とそのイメージ形成



図 3 a (1863)

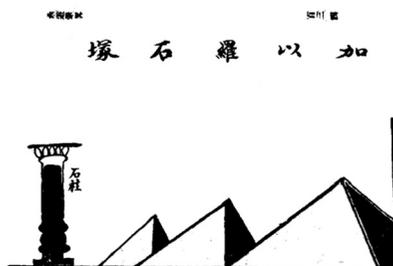


図 3 b (1921)

いて、帰途でエジプトを通過したとき、開羅 (Cairo) を「加以羅」と称し、金字塔の様子を下記のように記録していた。

加以羅城内有最奇之古跡，状如塚，皆石為之。闕下而鋭上，其最大者，即其下之一隅量之長約六十丈，高亦六十丈。

ここではやはりそれを「状如塚」と描写し、『地球説略』の記述と似ていて、まだ「金字塔」という語を用いていない。初版の同治二年 (1863) 版には挿図がないが、後に武昌天主堂印書館より刊行された 1921 年版では挿図が精緻で、頗る特色があり、あたかも『地球説略』(図 2) の挿図の版画風である (図 3b)。

その後、清末の駐外使節の斌椿 (1828-1897) が『乘槎筆記』(1866) を残し、そこには『瀛寰志略』の著者徐繼畬の序文があるだけでなく、しかもその観察がより細部に至っている。

又十餘里，至古王陵。相連三座。北一陵極大，志載基闊五里，頂高五十丈，信不誣也。方下鋭上，皆白石壘成。

この書では著者斌椿がエジプトでの遊歴を詳細に記述している。著者が出発して五十日の航程を経てエジプトに到着、ついに自らの目で「古王陵」の雄大さを確認し、前人たちの所説が「信不誣也」(たしかである) と感心する。然る後、現地人の案内で金字塔内部に入る様子を描き、「蛇行」と

いう語で中の道が狭く進みにくいことを表し、「横石刻字」が「古鐘鼎文」のごとき比喩は、むろん古代エジプトの石碑及びその独特な楔形文字を指している。最後にスフィンクスを描写する際に、「鑿佛頭如浙江西湖大佛寺像」をもってその大きさを比喩する。かれの同行者の記録『航海述奇』も同じくこれを「王陵」と称し、「其陵三尖形」と描写し、「三千数百年建造天下第一大工也」と驚嘆する。この文章は後に「埃及古王墓」と題し、北京で発行している『中西聞見録』第十四号(1873年9月)に転載された¹¹⁾。

19世紀におけるエジプトに関する他の記録は、例えば『教会新報』第57期(1868)には「埃及国古陵古廟図(附図)」を載せ、金字塔について次のように描写している。

國多古跡，有最奇者有三高阜焉。非亭，非塔，非塚，非台，以石砌成，有級可上，人可步而登焉。

ここでは『地球説略』の挿図を援用しているが、金字塔に対する認識が異なっていて、「三高阜」と新たに表現し、前人の「非亭，非塔」の認識の上に、さらに、「非塚，非台」と付け加えている。

ロプシャイトの『英華字典』(1866-69)が出版された後でも、関係する記述は相変わらず「金字塔」を採用するものはなかった。たとえば、ウィリアムソン(韋廉臣)が『万国公報』第五冊に載せた「埃及紀略」(1874、後に「小方壺齋輿地叢鈔」第十二帙第九冊に収録)には「大石塚墓」をもって表現している。

このような外国人宣教師の描写と中国人の金字塔への想像は、むろん近

11) 『中西聞見録』(The Peking Magazine)は1872年8月に北京で創刊された新聞であり、宣教師マーティン(丁韞良, William Alexander Parsons Martin)、エディンス(艾約瑟 Joseph Edkins)などによって作られた。それは当時の事実を客観的に記録したこともあり、中国の洋務運動には積極的な働きをした。1875年8月に廃刊。1876年2月、『格物彙編』(Chinese Scientific Magazine)は上海で創刊、『中西聞見録』の続刊とみなされる。日本では明治八年(1875)にこの刊行物を購入。

「金字塔」の由来とそのイメージ形成

代の新聞雑誌にも反映されている。清の同治十二年(1873)に上海で発行した『申報』に「記埃及国皮拉米事」という文章を載せている。「皮拉米」という漢字表記は明らかに Pyramid の音訳語であるが、一般には広く使われていない。

清末の『点石斋画报』(1885)に、『獅廟千年』と題する插画(図4)があり、初期の『坤輿図説』と『地球説略』にある金字塔図に比べて、新たにスフィンクス像を追加しているが、その顔、形はややかけ離れていて、少なくとも前にみた郭連城『西游筆略』に描かれた「鑿

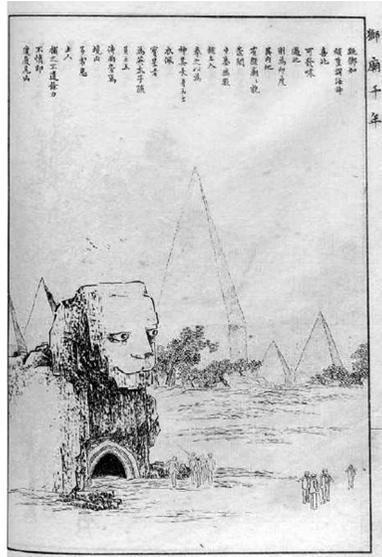


図4：1885年『点石斋画报』己六、四十三b

佛頭如浙江西湖大佛寺像」とは全然違い、金字塔はより尖っているように描かれていて、とくにその三大金字塔のうちの一塔だけを突出させて、異国情調を醸し出している¹²⁾。それで、中国人の金字塔への憧れを一層掻き立てることになるが、説明文には「金字塔」という語が使われていなかった。

1886年にエドキンズ(艾約瑟)の『西学略述』(巻六・史学)にはなお前人の記述を援用し、それを「帝王之陵塚工程浩大，修為方形高台。」とあるようにそれを「方形高台」と形容する。

ここまでに至ってはっきり言えるのは、ロブシャイト『英華字典』

12) それは光緒十一年(1885年)十月十五日の夜、かつて世界一周をした顔永京が、上海の「格致書院」で幻灯放映会を催した際の様子の一部として描かれている。

(1866-69)の出版前後の19世紀60年代に、大多数の中国語文献では「金字塔」という語を使わなかったし、むしろ旧説を踏襲するのがほとんどであった。よって、もし「金字塔」という語を中国人が古代エジプトの稜錐体の陵墓への象形的称呼とすれば、すなわちその建造物の外形が漢字「金」の形に類似するという理由から成立した語であれば、その説には他の言語学上の証佐として挙げるべきものがあるのではないか、言い換えれば、「金」という字をもってこういった形状を表す言い方がいつ頃に遡れるのかを答えなければならない。

この点に関して、やはり19世紀の英華字典の訳語に相応の証拠を探し求めることができる、たとえば(表2)：

表2 19世紀英華字典にある「金字」の語構成

英華字典	語詞	Pediment	Frame	Roof	Gable	Fastigate, Fastigiated
1844 ウィリアムズ 英華韻府歴階		金字房				
1866-69 ロプシャイト 英華字典			屋背架, 金字架	金字屋背, 高屋背	金字牆	金字様
1872 ドーリットル 英華萃林韻府		人字線, 金字房				
1899 鄭其照 華英字典集成					屋上之金字髻	

上の表に挙げた例を見ると、「金字」をもって頂尖下潤の形状を表す用法として早くも1844年のウィリアムズの英華字典には「金字房」の言い方があり、ロプシャイトの英華字典に用例が最も多く、すべてが家屋などの建築に用いられていて、すでに挙げた「金字形」のほかに、さらに「金字架, 金字屋背, 金字牆, 金字様」などがあり、ドーリットルの辞書はウィリアムズの用法を引き継ぎ、鄭其照に至っては「屋上之金字髻」と新たに追加した。これらの対訳辞典のほかに、さらに古い例として「金字山」という名称がよくみられる。たとえば、

「金字塔」の由来とそのイメージ形成

- * 金山在石泉県東二十里列嶂如屏崗巒聳翠。『大清一統志』卷 340
- * 万歴象山県志九都金山下宋侍郎俞懋文及孫承簡世居於此。『浙江通志』卷 43
- * 巴山県南一里又名金山，一峯分三崗而下形如金字，県治依之。『湖広通志』卷 10
- * 金山在州東二十里。『四川通志』卷 25

道光年間 (1821-1850) の『施南府志』にも「龍泉西峙，金字車盤，乃利川之勝。」とあるが¹³⁾，総じていえば「金字」をもって形状を表す歴史はさほど久しからず，つまり宋以前の中国語資料に現れてこないし，かつ北方ではこの言い方が少ないようにも見受けられる。それでは，この種の語構成が中国南方か四川あるいは広東語における一種の特有表現かもしれない。少なくとも香港で出版されたロプシャイトの英華字典に最も多く用いられることが，広東語においては造語力のある語構成として見なすことができよう。

逆に考えれば，日本人は「金字」をもって形状を表すかどうかを考えてみよう。いままでの調査範囲内に，「金字塔」の一語を除いて「金字」をもった語構成が用いられた例は見つかっていない，むしろ日本語自身の表現が目立っている。前述した通り，中国語の「金字塔」に対して，日本語では「スギナリヅカ」と訳されたのも，同じく形からくるイメージを重視するからである。

3. 金字塔に対する日本人の認識

日本人の金字塔に関する知識は異なる二つのルートから獲得したものである。一つは中国由来であり，もう一つはオランダ由来である。まず，前述した中国で伝播された金字塔に関するあらゆる記述や記載などはその媒

13) ここで主に湖北省恩施利川あたりに位置する山脈を指し，その他の各地にも同じ言い方がある。

体である書物とともに、ほとんど日本で受容されている。イエズス会士のアレニ（艾儒略）の『職方外紀』やフェルビースト（南懷仁）の『坤輿図説』はもちろんのこと、中国人徐繼畬の『瀛寰志略』と魏源の『海国図志』なども、日本で幾種類の翻刻本が出されている¹⁴⁾。特に明末清初の文言短篇小説集『虞初新志』は日本で広汎に読まれていて、1762年に日本に伝入した後、数多くの版があり、19世紀初頭にも下図のように和刻本『虞初新志』（20巻補遺1巻、清張潮輯、岡田茂兵衛、文政6年刊、1823）が出版された。

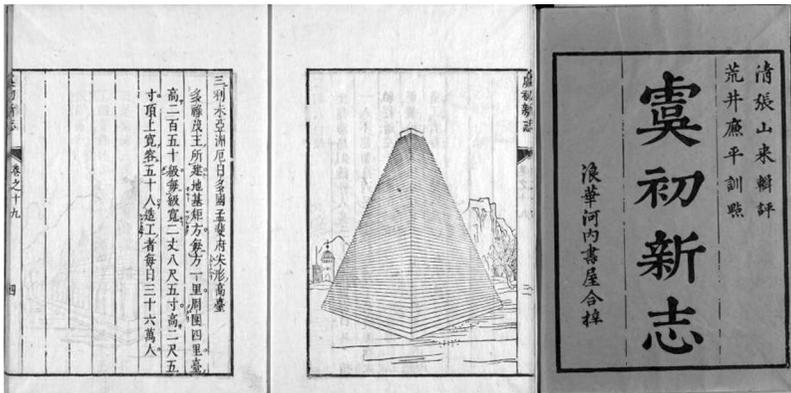


図5

これは完全にフェルビースト（南懷仁）の『坤輿図説』にある七奇図を翻刻したもので、文字説明の部分だけ少し削ったところがある。その後、日本では『日本虞初新志』（近藤元弘編輯、武市英俊、1881）や『本朝虞初新志』（菊池三溪編、依田百川序及評点、1883）などの漢文小説が出版されたものの、七奇図を採用したものはない。

14) 『職方外紀』は圀政九年(1796)の鈔本があり、『坤輿図説』は『虞初新志』を通じて日本で伝わり、『瀛寰志略』も文久元年(1861)の和刻本と明治初年の和刻本がある。『海国図志』は日本において23種の重刻本があるという(源了圓(1993)「幕末・維新时期における『海国図志』の受容」『日本学刊』による)。

「金字塔」の由来とそのイメージ形成

中国由来の漢訳洋書もこの知識伝播の重要なルートである。前に挙げた主要なものほかにさらに次の二種があり、一つはギュツラフの『古今万国綱鑑』(1838)で、1874年に日本で出版された訓点本(模礼松著, 大槻誠之(東陽)点, 塚本明毅, 重野安繹閣, 青山堂,)であり, その和解本(即ち日本語訳)も同年に出版されたが, 当時では原著者知らず, 模礼松(モリソン)の著と標註したが, しかし実際にはこれがギュツラフの著書である¹⁵⁾。

もうひとつは前に触れたウェイ(禪理哲)が1856年に出版した『地球説略』である。日本では四年後の万延元年(1860)に箕作阮甫によって加点点され, 上・中・下三巻に分けて老自館より出版された(図2)。そのみならず, さらに二種類の日本語訳があり, 下図のように, それぞれ明治七年(1874)の和解本と明治八年(1875)の訳解本である。

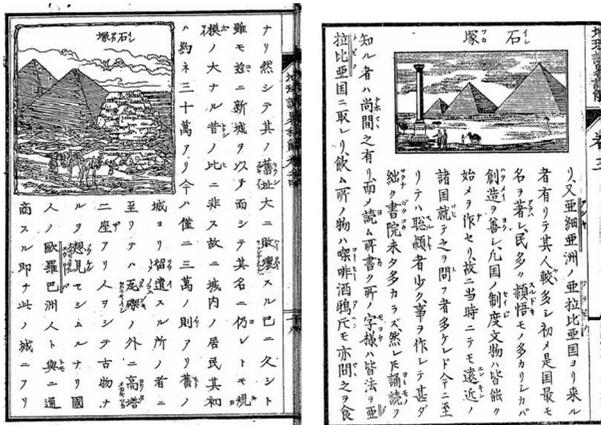


図 6 a

図 6 b

左図 6a 地球説略和解 (禪理哲著, 赤沢常道訳, 巻之4, 甘泉堂, 1874)
 右図 6b 地球説略訳解 (巻3, 亜非利加大洲図説, 福田敬業訳, 江藤善兵衛, 1875)

見た目では左が簡, 右が繁, 後者の挿図も基本的に和刻本(図2)を踏襲し, しかもさらに精密になっている。前者は別の挿絵を採用し, 「スフ

15) 鄒振環(2007)329頁。

インクス像」も見えている。

当然ながら、日本でも蘭学を媒介とする西洋知識を直接吸収するルートがあり、その視点からみれば、1796年に編纂された最初の蘭和辞典『波留麻和解』（稻村三伯編、寛政三年、1796）およびそれを底本としたダイジェスト版の『訳鍵』（1810）には、ともに、

Piramide 刹柱

と、語釈している。もう一冊の蘭和辞典『バスタード辞書』（1822）では「石碑」をもって対訳している。それより前にさらに1595年刊行の『羅葡日対訳辞典』には、下記のように「四角尖塔」と説明しているが、その辞書は日本では流通していなかった。

Pyramis, idis. Lus. Piramide. Lap. Suyebe foni ixiuo xicacuni ccugui aguctaru to.

蘭学の最盛期において、司馬江漢の功績がよく知られている、かれは1805年にすでに『和蘭通舶』なる書を出版し、内容の多くはオランダ語

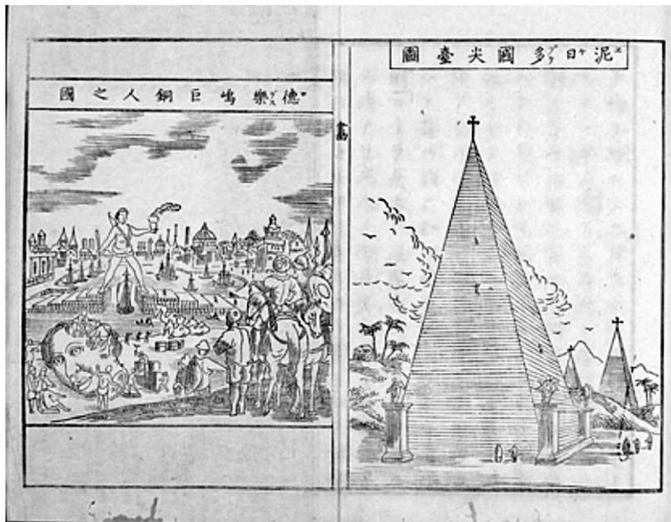


図7：和蘭通舶2巻（司馬江漢編，東都春波楼蔵，文化二年（1805）刊）

「金字塔」の由来とそのイメージ形成

からの翻訳である。その中には金字塔の附図(図7)もあり、七大不思議の「巨銅人」とともに、金字塔が「泥日多国尖台」として紹介されている。

此国ノ人物格物窮理ノ学ヲ好ミ、天文医術ニ精シ。城下ヲ去ルコト一里ニ尖^{トザリ}台三処ニアリ、甚大ヒナルコト、メグリ三百二十四歩、楷ヲ踏コト二百五十歩。其傍ラニ「アトロビンガ」ノ像アリ。

それをフェルビースト(南懐仁)の『坤輿図説』(図1)と比較してわかるように、金字塔の造型、構図および周囲の風景など細部にわたって不一致するところが多く、明らかに当時のオランダ版資料に基づいて描かれたものであり、日本語では「尖台三処」と記述している。

もう一冊の世界地理書『坤輿図識』(1847)¹⁶⁾もオランダ語から翻訳されたもので、同じく、

此国上古其威勢宏大ニメ其文物術藝ノ盛ナルヲ、今日ノ比ニ非ズ、其尖形高台趾、及ビ処処出ス処ノ質汗ヲ以テ推知スベシ。

と、金字塔を「尖形高台」として描かれている。ただし、こういった描写は後の文献に受け継がれていない。たとえば、日本最初の英和辞典『英和对訳袖珍辞書』(1862)はその編纂過程において当然蘭和辞典の影響を受けていると考えられるが、しかし Pyramid の解釈は基本的に漢訳洋書由来の説を受け継ぎ、「石塚ノ大クシテ屋根形ニナリタル物」とされている。この辞書はロプシャイトの英華字典より早いので、中には「金字塔」という語が出てこないのもあたりまえのことである。

日本人もむろん金字塔を訪れたことがある。歴史上に三回にわたる遣欧使節団も、それぞれエジプトを通る時に金字塔の威容を鑑賞した。第一回遣欧使節団は文久元年(1862)に欧洲へ開港延期を要求しに行くためであり、近代の啓蒙思想家福沢諭吉も随員として『西航記』(『福沢諭吉全集』第19巻 p 16)において当時金字塔を見たときの様子を次のように書いている。

16) 『坤輿図識』巻1-5、箕作省吾著、江都(江戸)夢霞楼蔵版、須原屋伊八、弘化四年(1847)。

「エジプト」にて「ピラミデ」の壮观たるは世人の周く知れる所なり。石を以て築造し、形四角尖柱、二個相對立せり。各々高さ四百尺、柱底の経六百尺。蓋し四千年前「エジプト」国王 Cheops の墓碑にして、当時之を建造するに二百万人の工を費せしと云ふ。

福沢諭吉は金字塔を片仮名で表記した初めての人であり、当時オランダ語の発音にしたがって「ピラミデ」と読み、四角尖柱形を呈すると記述し、そして四千年前のエジプト国王 Cheops の墓碑だと説明している。この認識は前人よりはさらに一歩進んでいる。四年後福沢諭吉の出版した『訓蒙窮理図解』（慶應義塾同社、1868）巻二には金字塔の絵を添えていながら、具体的な名称を記さなかった。

団体として金字塔を訪れたのは1864年の第二回遣欧使節の一行であり、下図8のように、帯刀の武士たちがスフィンクス像前で記念写真がとられ独特な光景を構成している。

当時の松平康道副使はそれを「奇形尖頂ノ大石塔三基」とし、「世界奇観ノ一」としている。故に2月23日に馬車に乗って見学に行き、それを「奇観塔」と称する¹⁷⁾。こういう認識も明らかにフェルビースト（南懷仁）

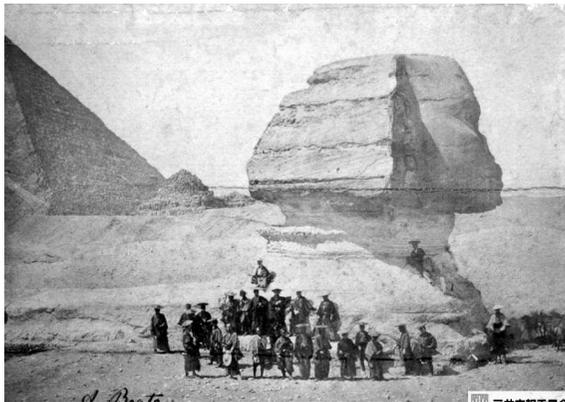


図8

「金字塔」の由来とそのイメージ形成

『坤輿図説』の七奇図説に出自する部分があると見られる。

第三回岩倉使節団の米欧回覧は明治開国以降の最も重要な行事で、帰途に、一行がエジプトに来て、『米欧回覧実記』(1878)第九十五卷「紅海航海ノ記」には下記のような記録を残していた。

「カイロー」府ノ博物館ハ、好古ノ士、千里ヲ遠シトセサル名所ナリ、又府中ニ存スル^{ヒラミヤ}錐形塔、巨人首ノ如キ、古時エジプトノ豪酋、奴隸ヲ役シ、俘囚ヲ駆テ、造リシ大建築ニテ、之ヲ視テ以テ古ヲ想像スルニ足ルト云。

ここでは金字塔を「^{ヒラミヤ}錐形塔」と呼び、片仮名で当地の読みを記している。この種の訳し方が明治以降になって増えはじめ、例えば『万国奇談：一名世界七不思議』(青木輔清編、和泉屋市兵衛、1873)は純粹に世界七不思議を説いたもので、金字塔についても片仮名ピラミーデで表示している。

亜非利加州の内エジプト国の介爾阿^{カイロ}といへる処に近く、ピラミーデと称せる奇形の石塚大小ともに数多あり。

その直後にまず図9aのように、「亭にあらざ塔にあらざ、粗塚の如く」



図9a



図9b

17) 『遣外使節日記纂輯』第二，日本史籍協會，昭和4年4月



図10：『世界新名数』（松雲堂，1874）

と紹介し、『地球説略』の描写と相似ている。また図9bでは「絶大な女子地中より首を出せるに似たり」とし、半身は砂に埋もっていて、その形が何物であるかを知らずと言っている。これは後の「女面獅身像」の言い方に根拠を提供しているものである。しかしその記述は金字塔を「石塚」と見なすところから、石黒厚訳述の『輿地新編』（1874）と同様に、まだ『地球説略』の影響から抜けていないのがわかる。

同年の松川安信編『世界新名数』（松雲堂，1874）に、金子塔が巨大な烟突として描かれたようである（図10）。しかもその片仮名のピラミードを、「比羅美井天」という漢字で音訳している。

明治八年（1875）に出版された『輿地誌略』（内田正雄編訳）は広く影響を及ぼしている世界地理書であり、福沢諭吉の『西洋事情』（1866-70）と中村正直の『西国立志編』（1871）と並べて「明治三書」と称し一時世を風靡したものである。その巻八「亜非利加洲」には当時として最も詳細に金字塔の内部結構（図11）について解説されているが、相変わらず「大石塚」と称するに止まっている。ただし、本文内では、

就中、石塚ノ極メテ大ナル者ガアリ、「ピラミッド」ト名ク。

と言いながら、すぐ後の割注ではわざわざ「石塚ト訳セルハ字義ニ非ズ」と断っていたところからみれば、すでに「石塚」の訳が妥当とは言えないことを意識し始めた。

薩摩藩士で後に外交官・政治家になった中井櫻州は明治十年に出版した

「金字塔」の由来とそのイメージ形成

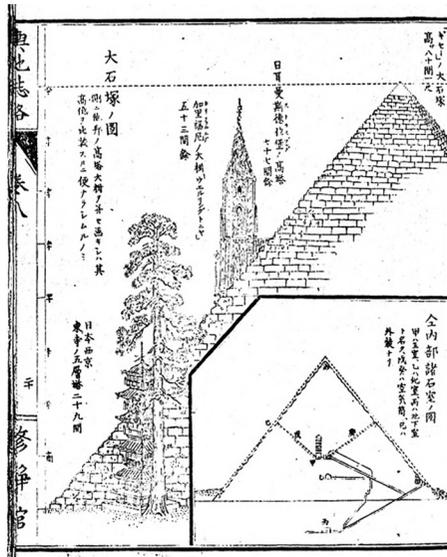


図 11：『奥地誌略』

『漫遊記程』(1877)の巻上の末尾に次のように描写している。

九日、米人三名ト共ニ朝六時ニ汽車ニテカイロ府ニ向ツテ發ス。……第十二時遙ニ古墳ピラミットヲ雲間ニ望ム。此石塔ハ四千年前ノ遺物ニ係リ高サ四百尺ニ及ヒ、其形チ尤モ奇偉ニシテ四角ノ尖塔ナリ。皆大石ヲ以テ造ル。

ここの金字塔を「ピラミット」と音訳し、明らかに英語の発音に由来し、しかもそれを「四角ノ尖塔」と称する。続いて巻中のエジプトの部分で詳述を加えたが、やはり「大石塔」をもって称している。

十一日、埃及王ノ離宮赴ク。……朝食後第七時半、米人三名、魯人一名ト共ニ馬車ヲ命シ、ナイル河ノ鉄橋ヲ過ギ、大石塔ヲ見ント欲シ、行程我三里許ヲ走ル。石塔ハ沙漠ノ丘陵上ニアリ皆巨大ノ方石ヲ以テ疊積セシモノニシテ、大ナルモノ直立四百尺ニ過ク、中央ニ穴アリ。匍匐シテ入ルヘシ。別ニ二箇ノ大石塔アリ、小ナルモノ数フルニ違ア

ラス。是レ古昔国王の墳墓ニシテ四千年ノ風霜ニ消磨セスシテ依然今日ニ存ス。

こういった描写に対して、当時の漢学家依田百川は頭書で評して曰く、尖塔実宇宙間無比奇物、人人皆能知之而其能遊矚者幾人。壯哉遊也、健羨健羨。

これで当時においてこの目で金字塔をみた人は皆から羨しがられていることがわかる。

一方、音訳語のピラミッドは最初漢字語の対訳として併用されていたもので、後になって独自に使用しはじめる。明治19年(1886)に出版された『世界旅行万国名所図絵』に、旅行の名勝地として当然ながら金字塔について紹介しなければならない。下図のように、金字塔及びスフィンクス像が生き生きと描かれているが(図12)。漢字語「金字塔」を使用せず、一

律に片仮名の「ピラミッド」しか使われていない。

ここまで見てもわかるように、「金字塔」という語は早くも明治初期の英和辞典に用いられるが、具体物への描写として一般書や文章にはあまり使用されていないようである。たとえば明治初年に最も流行っている『万国史略』(明治4-8)という世界史の書物に相変わらず「大石塔」と称し、その後の『万国史』(1886)も「尖塔」と「獅面女身像」を使い、1899年に至ってもなおも「三角石塔」(『埃及近世史』¹⁸⁾柴四



図12

朗, 1889) または「三角塔及び女面獅身の像」などが使われている。

したがって、英華字典にある「金字塔」の訳し方が日本に伝わる前に、日本での訳し方は主に「石塚」または「奇観塔」或いは片仮名の音訳をしていた。明治六年(1873)に日本に伝わってからのある期間においてもただ辞典に載せただけで、「金字塔」の使用がさほど活発ではなかった。それでは、文章中における「金字塔」の表現がいつ頃になって現れてくるのであろうか、これについては『万国史記』(1879)の出版を待たなければならなかった。まさしくこの漢文で書かれた世界史に、「金字塔」がはじめて登場することになるのである。

4. 『万国史記』の流布と「金字塔」の普及

『万国史記』(1879)は明治初期の漢学者岡本監輔¹⁹⁾によって漢文で編纂された世界通史の読物であり、中村正直の審閲を経て、内外兵事新聞局より出版された。駐日清国公使の何如璋及び副島種臣、重野安繹(1827-1910、薩摩藩士)、中村正直(1832-1891、幕府儒官)、岡千仞(1833-1913、仙台)、島尾小弥太(1847-1905、長州藩士)、川田剛(1830-1896、備中松山藩士)、島田重礼(1838-1898、幕府儒官)など錚々たる漢学者と著名人から序跋をいただき、その書は日本で好評を博しただけでなく、中国と朝鮮半島にもよく売られ、世界史の東アジアにおける普及に重要な役割を果たしていた。

「金字塔」という語はそのアジア部分巻四の「巴勒斯坦記」に出てくる。

当是時、厄日多人口稠密，文明冠於天下。法老卒，約瑟福繼歿。厄日

18) 玉瑟齋主人訳『埃及近世史』は、1900年5月に『清議報』第45期に発表されている。また1902年に麦鼎華訳、上海広智書局印。そして章起渭訳『埃及近世史』も「歴史叢書」の一冊として商務印書館の1903年版がある。

19) 岡本監輔(1839-1904)、探險家・教育者。徳島の農家に生まれ。号韋庵。嘉永元年(1848)東咳門に入り漢学を修む。前半生は樺太探險と北海道開発に身を投じ、後半生は儒学教育に努め、台湾総督府国語学校教授、私立神田中学校校長などをつとめる。漢学復興のために努力し、明治14年に結成された斯文会の初代書記として腕をふるう。著書に『北蝦夷新誌』、『窮北日記』、『烟台日記』、『万国史記』等39種もある。

多王惡以色列子孫漸昌，而其法異己。虐使之如奴隸。凡百苦役皆令希伯來人當之。今尼羅河畔所有金字塔亦希伯來人所築。

この巻四にはほかに「亜西里亜記」「西里亜記」「亜刺伯記」をも収録しているが、いずれも「金字塔」の字面が見あたらない。しかも『万国史記』巻五のアフリカ洲「亜非理駕史」におけるエジプト篇「厄日多記」や²⁰⁾ その他の章にもやはり「営工大石塚」という伝統的な表現を使っていて「金字塔」の使用が見られない。つまり、二十巻本の『万国史記』において、「金字塔」という語はたったの一回しか出現していないし(下図の後ろから四行目の後半に「金字塔」がある)、しかも本来のエジプト篇で出たものではなかった。

それでは、このような金字塔に対する表現上の不統一は岡本の『万国史記』が異なる底本に依拠していることによるものであろうか。たしかに岡

千仞の序文に曰く、岡本は「輯和漢近人訳書数十部，撰万国史数十万言」と当時の人の訳書数十部を参照しながら編集したものだと言っている。『万国史記』の凡例にも「此篇就翻译諸書，摘録其要而成」と同じことを書いている。いわば数多くのテキストからの抄録によって編集されたのである。ただし違う見方もある。狭間直樹(2002)は金沢治編『岡本韋庵先生家系と年譜』を引用しながら、当書は、友人三宅舞村の弟である三宅憲章がフランス語から訳した書稿を再度漢文に直したものだと言って

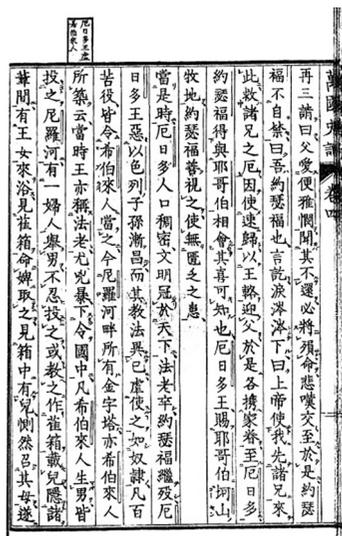


図 13: 『万国史記』(1879)

20) 後に『埃及国記』と改めて、小方壺齋輿地叢鈔第十二帙第九冊に収録。

「金字塔」の由来とそのイメージ形成

いる。そこで井上羽城編『三宅憲章翁』(1920)を調べてみると、中江兆民についてフランス語を習うことが書かれていて、岡本監輔との交友の誼みにも触れたが、訳書などに言及することはなかった。数年後に二人が一緒に『万国通典』(岡本監輔著、三宅憲章校、集義館、1884.8)を出版したことは確かであるが、それは日本語によるものであった。

これにより、その件を調査するために二つの方向が示された。一つはフランス語の翻訳から当時の資料に「金字塔」の用法があるかどうかを確かめるべきである。しかし、この点を突き詰めてみたが、結局1879年以前に出版された仏日辞典類には「金字塔」をもって対訳した例が見られなかった。逆に日本仏学の祖と言われている村上英俊が明治三年(1870)に漢文で翻訳した『西洋史記』²¹⁾(はじめて世界史の本に「史記」の名称を使った)があった。五冊の上古史と五冊の中古史の部分しか出版できなかったが、その巻一には金字塔に関する記述がみられた。

令族人等従事大難事業。命族人等造営尖頂四角大石廟及日表，又當作諸街陌矣。

(茂按)：地球説略曰，……非亭，非塔，状如塚者，即碯居符氏族人等造営尖頂四角大石廟乎，待後考。

訳者自身の按によれば明らかに村上が『地球説略』を読んだことになる。ただし金字塔は建築物かどうかをまだ分からないようである。その巻一にももっぱらパレスチナ即ち「把列私智倭国」^{ハレンスチ子}を論ずる一節があり、ただ用語は岡本監輔と異なり、中には金字塔に関する記述もない。ほかに巻二にある「埃及史」の部分があり、そこでも金字塔を「四角柱塔」と称するだけである。たとえば、

近部建造有名義碎布^{ギゼブ}四角柱塔者。

すなわち、同じ漢文で書かれた世界史とはいえ、しかも岡本がそれを参照したかもしれないが、少なくとも『万国史記』にある「金字塔」の用法

21) 『西洋史記』駝儒屢原撰、村上義茂重訳、達理堂蔵版、1870年。

はここからは出自したものではない。

もう一つの方向は岡本監輔の訪中経歴を重視するもので、岡本は生涯にわたって四回中国を訪ねていた。『万国史記』の出版前に限って言えば、1875年と1876年の二回があり、その後1900年と1901年も二回行ったことがある。もし彼が中国訪問の際に当時の中国語文献を収集していれば、上述したような「巴勒斯坦記」に由来する「金字塔」の孤例は中国語に出自している可能性もなくはない。この糸口をたどって当時中国語で書かれた世界史、とりわけパレスチナ史を調べてみたが、本文で挙げた上述の中国語文献の範囲内では、同じく「金字塔」の表記は見当たらない。むろん未見の資料があることを承知の上ではあるが。

だから、岡本監輔『万国史記』にある「金字塔」の用法の由来について、いったい彼自身が初めて使用したものか、それとも他人の資料から写したものか、いまだに確定できないのである。もし前者であれば、おそらくかれは英華字典の訳語を参照しただろうと考えられる。もし後者であれば、やはり日本語文献由来か中国語文献由来かの区別をしなければならない。

「金字塔」は岡本監輔『万国史記』の中に一回しか出現していないものの、その書物は日本で広汎な読者を獲得しただけでなく、中国にも広く受け入れられている。単に時間軸で見れば、『万国史記』の用例は今日までに最も早く文中に出現したものだったが、同年にはもちろん別の翻訳書、たとえば『拿破崙第一世伝』(巻二、四十二、1879)にナポレオンが軍勢を率いてエジプトへ遠征する時、金字塔の附近で著名な役をした、いわば「^{ピラミッド}金字塔ノ戦ノ事」が知られている。

さらに明治16年(1885)に翻訳出版された『百科全書』(文部省)下巻に、エジプトの古物に触れて、何回も「金字塔」という語を使っていた、たとえば、

而シテ目ヲエジプトノ金字塔、寺院、塚墓等ノ上ニ転スルトキハ、即チ其開明ハ今世ニスル最古史乗ノ已前ニ在リテ、(1036頁)

「金字塔」の由来とそのイメージ形成

また『百科全書』「養樹篇」(William Chambers, 坪井為春訳, 1885)には、金字塔をもって樹木の形状を表すようになった。(前に「スギナリヅカ」の言い方があったように)

* 此樹ハ速ニ成長シテ奇麗ナル金字塔状ヲナス

* 奇麗ナル金字塔状ノ木トナリテ其高サ五十

かの有名な評論家徳富蘇峰はベストセラーとなる『将来之日本』(1886)において次のように金字塔を巨大な工事と喩えている。

曩にステフエンソン氏が倫敦府よりビルミングハム迄の一線を作りしや。当時世人が驚く可き大工事となし。恰もチエオプス^{フィラミッド}の金字塔の如く思惟したり。

それ以降もたとえば、明治21年の『如氏地理教科書：中等教育』(1888)に、「大金字形塔」のように、漢字表記とカタカナ表記が一緒に同一概念を表している例が多い。

ナイル河ヲ遡ルニ際シ、先ツ旅人ノ眼ヲ驚スモノハキゼーノ大金字形塔並ニメムフィスノ旧跡是ナリ。

その後、「金字塔」を用いて表現することが一般化していく。たとえば、『亜比斯尼亞国王子刺西拉斯経歴史』(ジョンソン著, 積善館, 1890)には「王子等金字塔ヲ一覽ス」のようにルビなしの形でも使用されていく。

20世紀に入ると、金字塔がエジプトの建造物から次第に比喩的な意味に傾いていく。たとえば1900年に高安三郎(月郊)の創作した小説『金字塔』は、洒落た装幀で、口絵には確かに金字塔とスフィンクス像が描かれているが、しかし内容上ではエジプトの金字塔とは全然関係なく、いわば社会小説であり、ある東京人は人生の苦悩から、労働者になってからさまざまな社会問題に直面している様子が描かれている。このことから、「金字塔」という語はもうすでに具体的なイメージから脱して、ある種のモダンな、象徴的意義を帯びる名詞として使われ始める。この小説でも社会的地位が高いところから底層へ転落している意味合いをタイトルに含めて

いるように見受けられる。

日本人の金字塔に対するイメージの拡大と言葉の広泛な使用にしたがって、明治末期では、「金字塔」を最高峰や不朽な業績などと比喻するようになった。たとえば、『読賣新聞』(1908.04.07)朝刊第六面には、

美的生活論者として(高山樗牛)博士の名は明治思想史の金字塔上に銘刻せらるべき文字である。

とあるように、より抽象的な事柄にも使われている。明治後期の教科書には「金字塔」なる一課を設けていて、芳賀矢一編『中等教科明治読本訂正字解・第4・5学年用』(東雲堂, 1909)ではその「大金字塔」を「ピラミッド古代国王の墳墓」と解釈し、その本文中に抽出できる形容詞は「巍然、悠久、厯大、不朽、儼然、優秀、記号的、具象的、数量的、崇高莊嚴、怪奇不自然、典雅優美、崇敬」などがあり、まさしくこの時代における金字塔の文芸上描写の主要用語となっている。さらに教科書の普及によって、人々の金字塔に対するイメージは具体的な実物から抽象的な象徴意義に変わっていくようになる。即ち金字塔をもって「巍然、悠久、厯大、不朽、優秀、崇高莊嚴」などのプラス意義を表現することができる。たとえば、1928年の『国民新聞』には、

フーバー氏こそは実に「米國繁榮の金字塔」である。

の用法が見られ²²⁾。アメリカ大統領選の最中に一個人を褒めたたえるのにこの語を使うようになる。この用法は後の大戦中にますますヒートアップして、やれ「銃後赤誠不滅の金字塔」とか、やれ「ソ満國境に不滅の金字塔」とか、士気を鼓舞するための一種の特殊表現として確立されてしまう。さらにはある領域、あるところに業績を残したことを、「～に輝く金字塔」をもって褒めたたえ、形式上には、「～金字塔を打ち立てる」という慣用句表現をもって英雄的壮挙と偉大な功績または最高レベルに達したことを

22) これらの用例はみな『日本国語大辞典』に挙げられたもの(1950年)より古い。

「金字塔」の由来とそのイメージ形成

言い表している。ただし、後述したように、この新しい使い方は中国語には伝わってなくて、日本語のコンテクストだけに使われ、あるいはその殖民地での使用に止まっている²³⁾。

一方、底層より頂点までの形状からくる比喩的な意味がなおも用いられている。たとえば「教育の金字塔的發展」(高山直通著『富と教育』明治図書、1925)などが見られる。ただし実際にはこのような形状からきた意味が徐々に片仮名「ピラミッド」によって担われるようになり、たとえば1930年の『モダン辞典』には「ピラミッド」をつぎのように解釈している。

古代エジプトの墓場用の大建築物。下から積み上げ、上になる程少なくなつてゐる。従つてこんな種類の事物の名詞、形容詞に使ふ。

すなわち、片仮名のピラミッドはそういう形状の修飾や比喩に多く使われているので、数学幾何学などの概念では基本的に片仮名語を使っているし、次第に、漢字語と別々の意味分担をすることになってくる。「金字塔」は抽象的比喩意味にますます傾斜し、逆に片仮名語はエジプトの建造物及びその形状を表示する用法がより一般的になってきている。

事実、「現代日本語書きことば均衡コーパス」にあるここ四十年間の用法を調査してみると、漢字語の「金字塔」がわずか46例で、すべて比喩的意味に使われている。対して片仮名のピラミッドは714例にも達して、エジプトの金字塔という実物を表す以外、その形状から想定された比喩義も多く担っている。

5. 中国語における「金字塔」の使用

「金字塔」という語の中国語における使用は岡本監輔『万国史記』の中国での流布と切っても切れない関係がある。その書物の中国での流布と影

23) たとえば『中国近代体育史』(1989, 北京体育学院出版社)に次のような記述がみられる。「『新京日日新聞』吹嘘它是什么「劃時代的創舉」,是「滿洲体育界不朽的金字塔」。

響については数多くの研究があり、たとえば鄒振環(2007)の研究では、書誌と版本の面から詳細な紹介をすると同時に、19世紀の中国に比べて、日本では少なからぬ「万国」をもって命名する地理書と歴史書が出版されたという²⁴⁾。最近の研究として潘光哲(2014)の新著が挙げられ、そこには専ら一章を設けて「知的倉庫」としてのその書物がいかに中国知識人に世界史的な養分を与えたかについて論じたのである。むろん、近代史研究の大家である王凡森氏も早くからその点を論及している。

清朝末期からのいわゆる啓蒙運動について取り上げるとき、往々にして一つの重要な源——世界史教科書——を忘れがちである。実際には、世界を知るリソースの非常に限られた時代では、歴史教科書の提供する種々の知識は人々の思考にまるで天窓を開けたように光が差し込み、そこからの模倣、受容、または自身の歴史および文化を批評するための最も重要な材料となっている。日本人岡本監輔の『万国史記』、李提摩太(Timothy Richard)が翻訳した『泰西新史攬要』などの書籍は、明らかにいくつかの未知でかつ先進国の歴史を提供してくれた。よって、人々が思考し、現実を批判する際に最も具体的な根拠を提供してくれた。1880年代以来、中国に現れた政治的な論評や論説書にはこうした世界史教科書の影が見え隠れするわけである。たとえば、宋恕の場合、非常に鋭い議論の多くは岡本監輔『万国史記』からインスピレーションを得ていることがわかる²⁵⁾。

その本は数種類の版があり、最近になってもなお多くの研究は、その中国伝入の時代について議論しているが²⁶⁾、少なくとも十九世紀末においては中国で広く流行していることがたしかである。一早くそれを「必伝之巨製、不朽之盛業」と評価したのは、王韜の『扶桑游記』(1879.6.21条)で

24) 鄒振環『西方傳教士與晚清西史東漸』上海古籍出版社, 2007

25) 王凡森「歴史教科書与歴史記憶」『思想』第9期2008年5月

26) 王艷娟「『万国史記』在清末中国的傳播和影響」『清史研究』2016年8月第3期; 孔舒 http://www.360doc.com/content/15/1229/14/946779_523940144.shtml

「金字塔」の由来とそのイメージ形成

あり、おそらく彼が訪日中に出版されたばかりの原書を直接読んだ後の感嘆であろう。

近代啓蒙思想家の梁啓超もその本に対する評価が高く、氏の「読書分月課程」(1894) (後に横浜大同学校 1898 年の教材として) には、「西洋書を読む際、まずは『万国史記』を読んでその沿革を知り、次に『瀛環志略』を読んでその形勢を審かにする」と言い、さらに氏の『西学書目表』(1897) の史志の最初にこの『万国史記』(上海排印本、十本、五角) を挙げ、識語にいわく「雖甚略、然華文西史無詳者、姑讀之」と、とりあえずこの書から読み始めるのがよしとのことだ。同書の後に付した「読西学書法」には、さらに「通史有万国史記万国通鑒等、通鑒乃教会之書、其言不盡可信、不如史記」と、西洋人の編集した『万国通鑒』と比較し、『万国史記』のほうは宗教色がより少なく、信ずるに足ると言っている。梁啓超自身の編集した『史学書目提要』の中でもこの書は最初に位置付けられており、この書を通して人々は「大率研求新政新学者勝、擁虛名而無實際者敗」と新しい歴史観の重要性を認識させられ、これこそ「古今不易之理」と考えている。

たしかに、日清戦争の敗北によってすでに見識のある中国人をしてどこに向かうべきかを知らされた。そうした知識人の洋書閲覧の需要に応じて、多くの本が訳されていた。西洋の政治、経済、社会学を紹介するだけでなく、西洋の歴史地理及び発展の概況を紹介するものも多かった。『万国史記』もそうした流れに乗って、中国で発行量を伸ばし、一説では 30 万部も流布したという。日本の漢学者で京都大学教授の内藤湖南の訪華記録『燕山楚水：支那漫遊』(1899) には中国人蔣国亮との次の対話があり、その辺の事情を知ることができよう。

蔣：貴国書籍翻して中文と作すは此れ大に有益な事。既に以て支那の文明を開くべくして、而して貴国又其の利を得ん。近日の『万国史記』『支那通史』のごとく、中国人が此書を買ふ者甚だ多し。

惜しむらくは、此類の書訳出する者甚だ少き耳。故に弟甚だ貴国人が多く東文書を訳せんことを願ふ。貴国維新時の史、及びに学堂の善本のごとき、猶ほ益ありと為す。君、以て然りと為すや否や。

内藤：現に設けて善鄰訳書館あり。吾妻某氏、岡本監輔翁等と、方さに翻訳に従事す。聞く貴国李星使も亦頗る此事を賛すと。但だ弊邦人刻苦翻訳する所、滬上書肆、輒ち翻刻售出せば、則ち邦人精力、徒らに射利の徒の攘むる所の為らん。又貴国官司厳査を要す。貴邦石印書籍、価極めて廉、弊邦の敵する所に非ざる也。『万国史記』、即ち岡本翁の著、『支那通史』は那珂通世氏の著。二君僕皆之を識る。岡本嘗て貴国に遊び、闕里先聖の址を訪ふ。那珂は即ち僕か郷先輩なり²⁷⁾。

この書物は中国にだけ売れたのみならず、朝鮮半島でも経玄采による改編の『万国史記』が出されていた。ゆえに、「金字塔」という語の中国ないし東アジアにおける使用と流布に、『万国史記』の働いた役割を否定することができない。

中国語のコンテクストにおいて、最初の例が光緒二十三年の『時務通考』(1897) 卷二十二・史学八に見られる。

法王拿破崙第一起大兵来攻於金字塔下

この記述は前出した日本語の『拿破崙第一世伝』(1880) 的“金字塔ノ戦ノ事”と似ている。事実、『時務通考』は外国の最新情報を紹介するシリーズで、前年創刊の『時務報』との関係を考えると、日本からの影響も少なからずあるだろう。

梁啓超は「本館論説：少年中国説」(1900年『清議報』三十五冊) という社説に次のように「金字塔」を「老人」と譬えている。

老年人如埃及沙漠之金字塔，少年人如西伯利亞之鐵路；老年人如秋後

27) 『燕山楚水：支那漫遊』(内藤湖南著、博文館、1900、90-91頁)

之柳，少年人如春前之草。

とあるように、この一連の「老年人」と「少年人」との対比において、「金字塔」を古く、歴史悠久なものと比喻し、逆に「西伯利亞之鐵路」を新興的な開発の可能性のある未来と譬えている。

『清議報』に続く『新民叢報』(1902 (20). 12-13) にも梁啓超の「新史学」が載せてあって金字塔についてわざわざ括弧内で詳細な紹介をし知識普及に努めている一方、エジプト人の当時の技術の偉大さをほめている。

埃及文明之花實現於距今四五千年以前於金字塔觀其工藝之偉大〔金字塔者埃及古王之墳陵也其最大者容積七千四百萬立方英尺底闊七百六十四英尺側袤四百八十英尺世界最大之石碑也其能運如許重大之石材上舉於數百丈之高處則其時工械力之大可想〕

したがって、中国語のコンテクストに使う初期の例が梁啓超のかかわっている媒体に多くみられることは、人々に「金字塔」があたかも日本という媒介を通してから改めて中国語に「復活」させたと思わせるほどであった。というのは、前述した1873年の『申報』には、まだ音訳語の「皮拉米」を使っていたが、下記のように、新世紀になってからの『申報』(1903.5.11) によく意識の「金字塔」を使いだしたからである。

老王所建之金字塔，此塔自亞拉伯運石由沙漠中立基，構造巧絶工費無窮，而僅壯王陵之觀。

当然ながら、もう一つの中国伝来のルートを無視することができない。20世紀に入ってから、中国の英華辞典が日本の英和辞典の訳語を大量に採用し始めたので、即ち英和辞典の記述が直接20世紀の英華辞典に影響を及ぼしたわけである。それに伴って、「金字塔」が中国へ回流されただけでなく、井上哲次郎が英華字典から増補した「稜錐体」²⁸⁾ も Pyramid の訳語として中国へ里帰りされた。たとえば、

28) 『歴算全書』(1723) に「五錐体」「四錐体」が多用、また「錐体」もあるが、「稜錐体」が見られない。

1903年 『重訂商務書館華英字典』: Pyramid 稜錐体, 金字形塔.

1908年 顔惠慶『英華大辞典』:

A solid body standing on a triangular, square, 稜錐体, 角錐, 正稜錐体

Monuments, such as those of Egypt, 方尖塔, 埃及金字塔

To turn upside down, as, to reverse a pyramid, 顛倒, 倒置金字塔;

Relating to the pyramids, 方尖塔的, 金字塔的; pyramidal, 錐角形的, 稜錐体的

Having the form of a pyramid, 稜錐形的, 尖塔形的, 金字塔形的
to excuss the pyramid, 察觀金字塔

1913年 『商務書館英華新字典』: pyramid 稜錐体, 方尖塔

1915年 『広増商務印書館英華新字典』: Pyramid 稜錐体; 方尖塔;
埃及金字塔.

そして1916年の赫美玲『官話』では「稜錐体」を「新詞」と記し, 「金字塔」を「部定」(文部省認定)と認定するように, 両方とも新概念として定着し始めた。

pyramid 稜錐体(新, Math.), 稜錐(部定, Geom.)

monument as in Egypt 方尖塔, 金字塔(部定)

Color pyramid(新)色金字塔

しかも, この「部定」名詞審定の責任者である巖復本人も1914年の訳書『名学浅説』に下記のようにこの語を使ったことがある。

埃及人建金字塔。秦人造长城。

ここに至ってわかるように, 「金字塔」が19世紀の後半に中国語から日本語に入り, そして日本で増補された「稜錐体」とともにまた20世紀になって日本語から中国語に入ってきた。この種の英華字典と英和辞典の相互影響は, 近代中日概念伝播の重要なルートとなっている²⁹⁾。

29) 拙稿(2012)を参照。

「金字塔」の由来とそのイメージ形成

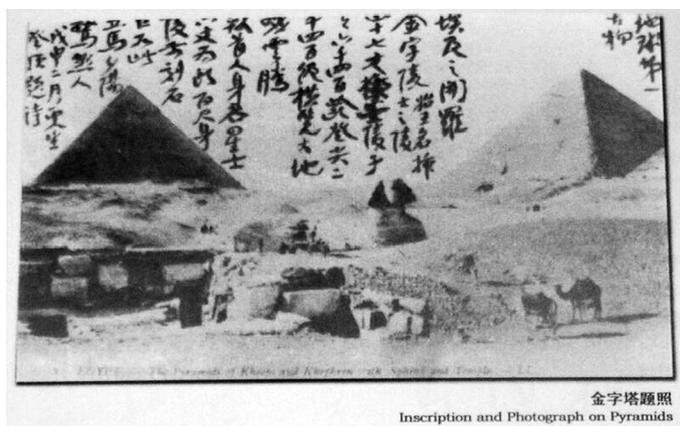


図 14

20世紀以降の中国人の中には、近代思想家の康有為がいち早く金字塔を訪れた一人であろう。彼は1904年歐洲十一国を漫遊する途中、エジプトを回ってその五千年の文明の悠久さを論じていた。

其建都在五千年前。金字塔，古王陵，石獸諸古跡，皆五千年物在焉，為大地最古文明之地矣。（『海程道經記』，1904年）

しかも後に1906年と1908年の両度にわたるエジプト訪問で、金字塔に登り、「地球第一古物」だと称賛し、写真にも題字している（図14）が、始終それを「金字陵」と称し、民国時に至っても変わらない³⁰⁾。

20世紀前期の代表的な辞典、たとえば『普通百科新大辞典』（上海国学扶輪社，1911）及びその後の『辞源』（1915）、『辞海』（1936）等もみなそれを収録したものの、比喩的な意味を記していなかった。ただ、『辞源』（1915）ではわざわざ「以形如漢文金字，故訳称金字塔」と、漢字の「金」の字形との類似からの訳だと説明している。

30) 康有為が宣統十五年に書いた明陵題跋は民国11年（1922）に当たる。「吾遍游歐美並各國陵，既書覽之，如埃及開羅與旧京錄士諸陵，号金字塔者，高数百尺，石大逾丈，其為奇麗，人所共知。」とある。

おわりに

「金字塔」の言い方は1866-69年のロプシャイトの英華字典に出自していて、「金字～」に基づく語構成も19世紀前半から中国語に用いられていた。しかし、17世紀以来の地理書ではエジプトのピラミッドが伝統的に「尖塔、高台、石塚」等で描写されているので、19世紀末に至っても、「金字塔」の称呼は中国であまり使用されてこなかった。逆に英華字典を通して、「金字塔」という語が19世紀70年代に日本で伝播し始め、その後絶えず使用し、しかも時代を反映させた最もファッションナブルな語の一つとなった。故に19世紀末になって在日中国人や他の媒体を通して、その語が中国への還流を果たした。そうした文化交流のサイクルの流れの中で『万国史記』の流布と日本語新名詞の吸収という時代の波もそれを押し進めたものだろうと考えられる。

日本語には片仮名の音訳語ピラミッドと中国語由来の漢語「金字塔」が併用しているため、意味的な分担が少しずつ分けられるようになり、前者は具体的なエジプトにある建造物、その物以外では、多くは数学幾何学などの「稜錐体」の意に用いられ、そしてその形状からくる「階層、等級」などの意味をも表している。対して後者の漢語は次第に「偉大、不朽、記念碑、頂点」等の比喻義にもっぱら使われるようになり、特に個人の功績を褒めたたえる用語として定着してきた感がある。

現代中国語の「金字塔」の用法はむしろ日本語のピラミッドと似ている。つまり底層から頂点までのこの状態、様子を、階層分明の社会構造や組織構造または商業モデルなどに例える例が目立つ。日本語の漢字表記語の「金字塔」の持っている比喩的意味、つまり「偉大的、傑出的な業績、ある分野での頂点に立つ」人物を褒めたたえる用法は中国語にあまり見られない。20世紀初めの梁啓超がかつて使っていた老人を比喻する言い方はもう使われなくなったが、しかし「人類は時間を恐れ、時間は金字塔を恐

「金字塔」の由来とそのイメージ形成

れる」と、人々がよく言っているように、中国語では「金字塔」は時には死亡をも意味し、時には永遠をも意味する。

最後に附表として、日中両国における金字塔の名称の変遷の軌跡を並べ(表3)、両者の影響関係や沿革を一目瞭然に追うことができるようにしよう。

参考文献：

- 楊波「一位晩清天主教徒の西游之旅」『尋根』2010年第5期。
- 鄒振環『西方伝教士與晩清西史東漸』上海古籍出版社，2007年12月。
- 鄒振環「『坤輿図説』及其『七奇図説』与清人視野中的「天下七奇」」『基督宗教与近代中国』古偉瀛，趙曉陽主編，社会科学文献出版社，2011年。
- 潘光哲『晩清士人的西学閥読史(1833~1898)』，台北：中央研究院，近代史研究所專刊99，2014年。
- 千葉謙悟『中国語における東西言語文化交流—近代翻訳語の創造と伝播』三省堂出版，129-140頁，2010年。
- 陳力衛「英華辞典と英和辞典との相互影響—20世紀以降の英和辞書による中国語への語彙浸透を中心に—」『JunCture』03号，名古屋大学大学院文学研究科附属日本近現代文化研究センター，2012年3月。
- 内田慶市・沈国威『鄺其照字典集成影印與解題（初版・第二版）』東亜文化交渉学会，2013年4月。
- 石川禎浩「近代日中の翻訳百科事典について」『近代東アジアにおける翻訳概念の展開』（石川禎浩，狭間直樹編，京都大学人文科学研究所附属現代中国研究センター研究報告）京都大学人文科学研究所，277-307頁，2013年。
- 庄欽永・周清海『基督教伝教士與近現代漢語新詞』新加坡青年書局出版，157-8頁，2010年。
- 狭間直樹「初期アジア主義についての史的考察（7）第六章善隣協会について——岡本監輔のばあい」『東亜』霞山会，416: 64-70頁，2002年。
- 狭間直樹「善隣協会・善隣訳書館関係資料——徳島県立図書館蔵「岡本韋庵先生文書」」『東方学資料叢刊第十冊』京都大学人文科学研究所漢字情報研究センター，2002年。

表3 金字塔を表す日中の用語の変遷

中 国		日 本	
作品名	表 記	作品名	表 記
17C 『職方外紀』(1623) 『坤輿図説』(1674)	石台 尖形高台		
18C 『虞初新志』(1704) 19C 『毎月統記伝』(1838) 『古今万国綱鑑』(1938) 『瀛寰志略』(1849) 『海国図志』(1852) 『地球説略』(1856)	尖形高台 塔 高塔 古王塚 塔, 墳塚如殿 石塚	『ハルマ和解』(1796) 『和蘭通舶』(1805) 『訳鍵』(1810) 『坤輿図説』(1847)	刹柱 尖台三处 刹柱 尖形高台
『西游筆略』(1863)	石塚	『英和袖珍対訳辞書』(1862) 『西航記』(1862) 松平康道(1864)	石塚 四角尖柱ピラミデ 奇形尖頂大石塔, 奇観塔
『乗槎筆記』(1866) 『英華字典』(1866-69) 『教会新報』(1868)	古王陵 金字塔 三高阜。非塔, 非塚, 非台	『西洋史記』(1870)	尖頂四角大石廟, 四角柱塔 ピラミーデと称せる奇形の
『中西聞見録』(1873) 『申報』(1873)	古王墓, 其陵三尖形 埃及国皮拉米	『万国奇談: 一名世界七不思議』(1873) 『附音挿図英和字彙』(1873) 『輿地新編』(1874) 『世界新名数』(1874) 『万国史略』(1874) 『輿地誌略』(1875) 『漫遊記程』(1877) 『米欧回覧実記』(1878) 『英華和訳字典』(1879)	石塚 金字塔 石塚 比羅美井天(ピラミーデ) 石塔, 大石塔 石塚, 大石塚, ピラミット 石塔, 大石塔, 尖塔 錐形塔(ヒラミヤ) 金字塔
『点石斎画報』(1885) 『西学略述』(1886)	狮庙 帝王之陵塚, 方形高台	『万国史記』(1879) 『拿破崙第一世伝』(1880) 『訂増英華字典』(1883-1884) 『百科全書』(1885) 『万国史』(1886) 『将来之日本』(1886)	金字塔(ピラミッド) 金字塔 金字塔 金字塔, 大石塚 金字塔 金字塔 金字塔
『華英字典集成』(1887)	金字塔形	『世界旅行万国名所図絵』(1886) 『埃及近世史』(1889) 《亜比斯尼亞国王子刺西拉斯経歴史》(1890)	ピラミッド 三角石塔(ピラミート) 金字塔
『時務通考』(1897) 『清議報』(1900)	金字塔下 金字塔		